

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・近代の日本語が恋愛など人生についての文学的な省察を損なっていると述べた随筆からの出題。
- ・本文の分量は昨年度とほぼ同じであった。すべて記述説明であり、設問数も四問と変化はみられない。解答欄の行数の合計は昨年度と同じで14行であった。
- ・総合的にみて、全体の難易度は、ほぼ例年並とみられる。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問二がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	坂口安吾「恋愛論」(一九四七年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ 変化なし ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 傍線部の「苦勞」の内容を文脈に即して具体的に説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 「あべこべ」という語が意味するものを対比的な構造のなかで説明することに工夫をこらす。
		問三	記述式	標準	傍線部の理由の説明する問題。(解答欄3行) 「ほんとうすぎる」ということの意味を明らかにしたうえで、それを筆者が「きら」う理由を説明する。
		問四	記述式	標準	傍線部について筆者の考えを説明する問題。(解答欄4行)。 万葉集や古今集に対する筆者の評価を参照しつつ、「恋愛」について考え、書いて「文化」にしていくという筆者の考えをまとめる。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・□ではしばしば評論や随筆がとりあげられている。だが、いずれであっても、文章の主題や筆者の主張を全体からの確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問のそれぞれがどのような意図をもっているか、その狙いを見極める訓練、その理解に応じた記述の練習を積み重ねておく必要がある。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・「共生」という語が、スローガンとして濫用されることで、人と自然の共生という事実から乖離して、特定の価値観を権威化してしまう危険性について述べた評論からの出題。
- ・問題文は比較的読みやすいが、解答に必要な内容を過不足なく読み取り、解答欄に収まるようにまとめるのは容易ではない。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	松永澄夫『感情と意味世界』
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・ 変化なし ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	評論	問一	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※傍線部の表現に留意しながら、前後の文脈の内容を踏まえて説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※傍線部の表現に留意しながら、前後の文脈の内容を踏まえて説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄4行) ※本文全体の内容を踏まえ、最終段落の内容を中心にまとめる。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・□は理系の単独の出題であるが、理系の受験生にとって、問題の水準は決して平易とはいえない。文理共通問題□のレベルに対応できるように学習しておきたい。
- ・文章のジャンルを問わず、単に字面を追うのではなく、その主題を本文全体からの確に把握するとともに、文脈を精確に理解する読解力とその内容を適切に説明する記述力が不可欠である。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・中世の法語(仏道修行者を教え導くための文章)からの出題であった。
- ・2025年度と同様、解答数は三つであった。
- ・設問構成は現代語訳一つと、説明問題二つであった。
- ・和歌は本文に含まれていなかった。

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『一言芳談』(未詳)
頻出度合 ・的中等	出典は稀
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)約450字(前年約520字)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	随筆	問一	記述式	標準	現代語訳。「世間の不定」「あやふき事」の理解がポイント。(解答欄3行)
		問二	記述式	標準	説明。「無常のことわりも、いかに言はむにはよるべからず。いささかなりとも心にのせてのうへの事なり」はどうか説明する。「いかに言はむ」と「心にのせて」の対比の理解がポイント。(解答欄3行)
		問三	記述式	標準	説明。「旅に出でたる思ひに住する」はどうか説明する。傍線部に続く箇所をまとめる。(解答欄3行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・中世・近世の随筆や歌論からの出題は、京大理系古文の一つの流れである。多様なジャンルの随筆や歌論にも慣れておく必要がある。
- ・時には平安時代の作品も出題されているので、多様な時代・ジャンルの文章に慣れておこう。
- ・主語、目的語、指示内容などを考えながら、文章全体の内容を正確に理解する練習を平素からおこなっておくこと。それによって説明問題にも対応できるのである。
- ・本文全体を現代語訳できるかどうか京大理系古文の根本である。現代語訳をする練習がいちばんに望まれる。
- ・今年は和歌が直接設問で問われなかったが、直接問われることもあるので、和歌の修辞、現代語訳、趣旨の説明など、和歌の対策は必ずしておきたい。